

中国残留日本人孤児から学んだこと(第2回)

## 残留孤児が経験した戦争の現実

浅野慎一

※兵庫県AALA連帯委員会『アジア・アフリカ・ラテンアメリカ(兵庫県版)』

2017年11月号掲載記事に若干加筆しました。

今回は、残留孤児が経験した戦争の現実について、そのごく一端を紹介する。

1945年8月8日、ソ連は日ソ中立条約を破棄して日本に宣戦布告し、翌9日午前零時を期して中国東北地方に侵攻した。

ただしこれは、日本政府や日本軍にとっては、あらかじめ予測していた事態だった。なぜならソ連は既に1945年4月、日ソ中立条約を延長しないと通告しており、その参戦は「時間の問題」と思われていたからだ。日本軍参謀本部や現地の日本軍(関東軍)司令部も、1945年春には「ソ連は夏にも侵攻する」、7月には「8月頃にはソ連が武力発動する」と実に正確に予測していた。

一方、関東軍は1943年以降、日本の戦局悪化に伴って、戦力を内地や南方に大幅に移動し、弱体化していた。そこで当初はソ連軍の侵攻を国境で阻止する作戦だったが、1944年9月には主力を朝鮮の近くに後退させ、1945年5月には「満州」全土を戦場にして迎え撃つ作戦に変更していた。

ただし関東軍は、このようなソ連軍侵攻の切迫や、関東軍の弱体化、作戦変更の情報を、現地の満州開拓移民をはじめとする日本人民間人には一切知らせず、秘密にした。それどころか1945年8月になっても、関東軍報道部長はラジオ放送で、「関東軍は盤石の安きにある。邦人、特に国境付近の開拓移民の諸君は安んじて生業に励むがよろしい」と放送していた。最後の開拓移民が現地に送り込まれたのは、ソ連侵攻当日の8月9日だった。

なぜ日本政府・関東軍は、ソ連との国境付近に住む大勢の日本人民間人に事前に情報を知らせ、避難させなかったのか。それは日本人が避難を始めると、それをきっかけにソ連軍がドッと攻め込んでくる可能性がある。だから関東軍が撤退し終わるまで、民間人には情報を一切知らせなかったのである。これを「静謐確保」という。つまり日本人民間人は、関東軍の撤退に必要な「静謐確保」のため、「生きた案山子」として、ソ連軍侵攻の最前線に無防備で置き去りにされたのだ。

そこで1945年8月9日、開拓移民をはじめとする日本人民間人は、「寝耳に水」のソ連軍の侵攻にさらされ、極度の混乱状態に陥った。大人の男性はほぼ全員、

徴兵（「根こそぎ動員」）されていたので、現地に残っていたのは、女性・子供・高齢者だった。彼女達は難民になり、広大な中国東北地方を逃げ惑った。

その途上、ソ連軍の爆撃・銃撃で多くの人々が殺された。ソ連軍は日本人の非戦闘員、女性や子供を容赦なく殺した。またソ連兵は、日本人の女性を次々に拉致し、強姦した後、その多くを殺害・遺棄した。

日本人難民の凄惨な逃避行は数カ月間にも及び、その間に飢餓・寒さも深刻化し、餓死者・病死者が続出した。足手まといになる乳幼児や高齢者は殺されたり、自殺したり、置き去りにされたりした。残留孤児達は、「日本人の老夫婦が『もう歩けない。足手まといになりたくない。撃ち殺してくれ。頼む』と、孫の少年に頭を下げた。祖父母を撃ち殺した少年は銃を放り投げ、狂ったように頭を抱えて泣いていた」、「泣き叫ぶ子供、既に死んだ人、出産する女性…。もう人間ではなくなった。歩けなくなると、その場で死ぬしかなかった。子供は足手まといになるので棄てられた。親達は『後で迎えに来る』と言い残し、子供を置いて立ち去った。たくさんの死体につまずいて転びながら、逃げ惑った」と当時の記憶を語る。

逃避行の途上、関東軍による救援はほぼ皆無だった。なぜならソ連軍侵攻の翌日（8月10日）、日本軍大本営は「本土決戦の主義に即し、確保地域を『皇土』に限定」し、「満洲は放棄」するとの作戦を出し、関東軍は先に撤退してしまったからだ。しかも関東軍はソ連軍の追尾を阻むため、鉄道や橋を爆破して逃げたので、日本人難民の逃避行は一層困難になり、ますます多くの人々が死んでいった。

日本人難民は、各地の難民収容所に収容された。しかし、そこでも食糧・燃料・衣類・医薬品は欠乏し、餓死・凍死・病死者が続出した。特に1945年冬から46年春にかけ、零下30度を下回る厳冬を越す中、残留孤児の実父母・兄弟姉妹もほとんどが亡くなっていった。

残留孤児は、このような凄惨な逃避行と難民生活の渦中から、かろうじて生還した子供達だ。だからこそ彼・彼女達は今も、平和の大切さを強く主張する。「私達の子供は、もう絶対に戦争で孤児にしたくない。私は平和であることを祈る。戦争は大嫌いだ。戦争がなければ、私達のような残留孤児問題は起きなかった。国家の指導者は、戦争で犠牲になる人の立場に立って考えてほしい」、「私は残留孤児として戦争の悲惨さを体験したからこそ、今も戦争が本当に大嫌いだ。戦争は人を引き裂き、傷つける。戦争は絶対にしてはいけない。日本政府は過去を直視し、侵略を反省し、平和を大切にすべきだ」。